

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

A waste recycling community and the media - a study of mary of ants town and Satoko Kitahara-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-09-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小谷, 七生, Kotani, Nanami メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2563">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2563</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 「バタヤ部落」とメディア表象

## ——「蟻の街」および北原怜子の事例から考える 貧困報道——

小谷七生

### 1. はじめに

本稿では、1950年代に東京の浅草隅田公園に存在した「バタヤ部落」である「蟻の街」に注目し、そのメディア言説と表象を分析する<sup>1</sup>。戦後日本において、都市下層部の廃品業者・屑拾い・リサイクル業者たちが集住した「バタヤ部落」が各地にあった。その代表的存在である「蟻の街」の報道や映画化作品に着目することで、当時の日本社会が、都市貧困層をいかに認識していたのか分析する。

本稿が「蟻の街」に注目する理由は以下の二点である。

第一に、「蟻の街」が当時の社会で一時的にはあるものの大きな反響を呼んだからである。廃品回収業者たちによる互助組織は珍しく、当事者は日記を書き、新聞や雑誌、演劇や映画といったメディアがこぞって取り上げ、一種の社会現象とまでなった。しかし、媒体の受け手が拡大する度に、社会に受け入れられやすい無難で抽象的な内容へと変化していった。その結果、後世まで広く認知される物語とはなり得ず、一過性のものとなった<sup>2</sup>。

---

<sup>1</sup> なお、バタヤの定義はともに高等学校教諭であった野中乾・星野朗の共著『バタヤ社会の研究』(蒼海出版、1973年)によると「捨てられたものを拾い、それを売却して報酬を得る職業またはそれに従う人々」である(37頁)。その呼称の由来にも諸説あるが、同書による「家々の塵芥箱を引掻き回して、その後パターンと蓋をする」から、あるいは「道端の物を拾う」から、という説が代表的なものである(36頁)。

<sup>2</sup> 「蟻の街」や北原怜子については現在でもメディアで時折言及されるが、多くの場合、その存在が忘却されているという文脈で登場する。例として、2019年に発生した台風19号にからめ、北原の行いを称賛する次の記事が挙げられる。高校生が倫理の教科書で彼女のことを知り、読者投稿欄に投書したものだ。『北原怜子(さとこ)。この名前を聞いてピンとくる人はど

第二に、貧困と女性性との結びつき、あるいは貧困問題を考察するのに格好の事例だと考えられるからである。当時、「蟻の街」の活動に尽くした北原<sup>きとこ</sup>怜子という女性が脚光を浴びた。彼女を取り上げたメディア発信者はほぼ全員男性であったこともあり、そこにはジェンダーバイアスが潜んでいた。また、そのバイアスは、彼女に関わった男性個々人の視線の問題というよりは、日本社会全体が共有していたものであった。北原は神聖化され、「蟻の街」報道は北原個人を賛美する側面が強くなった。そして、北原を賞賛するほど、受け手の意識は「蟻の街」に代表される貧困そのものから離れた。北原の実践を物語化して、心地よく消費する方向へ向かっていったのである。

経済回復の過程にあった日本で、貧困は絶対的なものから相対的なものへと移り変わっていった。その時期における貧困に関するメディア言説は、貧困に関わる問題提起を望んだ人びとと、それ以外の人びととの関係性を浮かび上がらせる。

以上を鑑みれば、「蟻の街」現象は、1950年代の貧困とメディアの関係を考察する際の好例であるだけでなく、「社会問題の焦点化と忘却」という、現在まで続く現象を考察するための貴重な資料となるだろう。

なお、本稿で書籍や記事を引用する際、旧仮名遣いは現代仮名遣いに、旧漢字は新漢字にそれぞれ改めて表記する。また、引用文中の [] 内は著者が追加した部分である。加えて、現在では差別的表現とされる可能性がある呼称も、当時の時代を正しく分析する目的でそのまま記載することとする。それでは、先行研究の検討に入りたい。

## 1.1 先行研究と本稿の位置づけ

「蟻の街」や北原怜子について、その関連資料全般を扱い、メディア表象を検討した研究書や論文は管見の限りでは見当たらない。ただし、それぞれの研究目的にそって「蟻の街」を取り上げたものは確認できる。

哲学者の鶴見俊輔『日本の百年〈9〉 廃墟の中から—1945～1952』(筑摩書房、2008年)は、アジア・太平洋戦争敗戦直後の日本を解説するなかで、東京の「バタヤ部落」の事例として「蟻の街」の歴史や当事者らの手記の一部

---

れだけいるだろうか」と書かれている。本記事の掲載前には、台風から避難しようとした路上生活者が、避難所で受け入れを拒否されたことが問題となっていた。「北原怜子のような、相手の境遇を思う対応が必要だろうと思う」と締めくくられたこの記事は、北原が、社会的弱者のために尽くした見習うべき人物としてのイメージをまとめていることと、その存在が今では忘却されているという事実を示す好例である(『毎日新聞』2019年11月4日東京版朝刊、5頁)。

を記載している。

社会福祉学者の岩田正美による、『貧困の戦後史 貧困の「かたち」はどう変わったのか』（筑摩書房、2017年）は、貧困の「かたち」の変容を主題としている。1950年代の「バタヤ部落」の説明資料として、「蟻の街」で暮らす子どもたちの作文をとりあげ、その実態を記す。

また、地理学者の本岡拓哉は、『「不法」なる空間にいきる——占拠と立ち退きをめぐる戦後都市史』（大月書店、2019年）で、戦後の住宅難やバラック街に注目し、多くの資料を用いてその歴史を辿る。そのなかで、「蟻の街」が映画化されたことや、のちに詳述する「蟻の街」の元住人、松居桃楼とうるが残した手記の内容にも触れている。

そして、農業史研究者の藤原辰史による『分解の哲学——腐敗と発酵をめぐる思考』（青土社、2019年）は、「分解者」というキーワードとともに屑拾いに注目しており、その一例として「蟻の街」と北原怜子にも触れている。

以上の単著からは、1950年代の日本社会の貧困、あるいは都市下層民の実態を知る上で、「蟻の街」の存在が注目されてきたことがわかる。

その他には、保育学の研究論文も存在する。大條あこによる「戦後の貧困家庭における子どもへの援助に関する研究 —蟻の街のマリア北原怜子の記録から—」（『桜美林論考 心理・教育学研究』3月号、2012年）がそれである。大條は、北原怜子による「蟻の街」の子どもたちへのアプローチ分析を中心に、教育学的視点から北原と「蟻の街」の姿を考察している。

以上が「蟻の街」や北原怜子を取り上げた主な研究だが、それらはいくまでも貧困やバラック街の歴史、屑拾いの役割、あるいは教育者としての北原に焦点を当てている。よって、「蟻の街」現象にまつわる報道の変化や、北原怜子の表象のあり方について詳しく分析したものはない。貧困とメディアの歴史を振り返る際、1950年代に一世を風靡し、その後は忘却された存在となった「蟻の街」や北原怜子に再注目することは、意義があると言えるだろう。また、貧困層を中心に社会的弱者に焦点を当てた作品は近年にも多数存在する。それらの描写に対しての何らかの提言も本稿で行うことができると考える。

以上の問題意識に基づき、本稿では、「蟻の街」に関連する新聞や雑誌の各種記事、そして北原怜子自身や、松居桃楼の著書を参考に分析を進める<sup>3</sup>。第

<sup>3</sup> 「蟻の街」の関係者による主な著書は次の5冊である。まず、北原怜子『蟻の街の子供たち』（三笠書房、1953年）、松居桃楼『蟻の街の奇蹟—バタヤ部落の生活記録』（国土社、1953年）。また、松居桃楼『蟻の街のマリア』（知性社、1958年）、そしてその増補改訂版である『アリの町のマリア北原怜子』（春秋社、1963年）。加えて北原怜子の父、北原金司による著書『マ

2章では、「蟻の街」の成り立ちやその時代背景に加え、スラム街全般が雑誌や新聞でどのように報道されたかを分析する。第3章では、北原怜子の来歴を確認した上で、彼女が雑誌や舞台でどのように表象されたかを考察する。第4章では、映画『蟻の街のマリア』に焦点を当て、製作時に男性が介在した事実や、それによって生まれたジェンダーバイアスについて注目する。そして第5章では、舞台や映画等では削除された、等身大の北原像について考察する。

それでは、「蟻の街」の成り立ちから振り返りたい。

## 2. 「蟻の街」と時代背景

### 2.1 蟻のように働き、蟻のように蓄える

そもそも「蟻の街」とは何か。この集団は、1951年、浅草隅田公園で誕生した。創始者は小沢<sup>もとむ</sup>求という、テキ屋の世界を渡り歩き、日中戦争時には北京で建設業を営んだ人物である。終戦後に上京し、バタヤに身を投じた小沢が会長となり、「蟻の会」が創設された。小沢は、当初は一攫千金を夢見てバタ仕切場、つまりバタヤから拾い物を買上げる場を設けた。しかし、先述した松居桃楼からキリストの話聞き、貧しい者の救済事業に目覚めた<sup>4</sup>。その後、ポーランド人で、長く日本で慈善事業を続けていたゼノ・ゼブロフスキー修道士（通称ゼノ修士）が「蟻の街」に関わるようになり、「蟻の街」の活動はますます活発になった<sup>5</sup>。

また、松居桃楼は、小沢求が住んでいた建物の管理責任者であった藤田元治弁護士の書生をしていた劇作家である。小沢がバタヤの共同体を作る時に、その団体への命名と趣意書の作成を藤田弁護士に依頼し、書生であった松居がその役を担った。「蟻の会」という組織名は松居の発案によるものだった。

「蟻の会設立趣意書」の冒頭には次のように書かれている。「蟻の会とは、『人間の屑』とさげすまれている浮浪者同志で、お互いに励ましあいつつ、自力で更生してゆこうとする会です」<sup>6</sup>。

リア怜子を偲びて——その愛は永遠に』（赤城会、1971年）である。

<sup>4</sup> 松居は小沢に対し、キリスト教を次のように説明している。キリストは、金持ちや大臣より「ルンペンや前科者」らの方が「天国に行く可能性はるかに多いと断言」したのだと。小沢は、「ううん… 偉い奴があるもんだ…… 俺は、この年まで、世のなかにそんな考え方があるとは夢にも思わなかった」と感心したという（松居、1953年、55頁）。

<sup>5</sup> 「ゼノ・ゼブロフスキーは長崎にある聖母の騎士修道院に属するフランシスコ派の修道士」だった。「聖母の騎士創立者コルベ神父」について来日したあと、「日本国中の浮浪者部落を慰問してあるい」ていた（同上、78頁）。

<sup>6</sup> 松居、1953年、27頁。

つまり、彼自身は仕事を持ち、バタヤという立場ではなかったが、バタヤたちの境遇を改善したいという思いで自らも「蟻の街」に積極的に関わるようになったのだった。高名な舞台作家、松居 松翁<sup>しろうおう</sup>の息子で、中退したとはいえ早稲田大学出身の彼はエリートである<sup>7</sup>。周囲からは先生と呼ばれ、小沢とともに「蟻の街」の活動のなかで指導者的役割を担っていた。その彼が、「蟻の街」を中心に、バタヤの記録を残そうと文章を書いていた頃に、のちに詳述する北原怜子と出会う。松居は、彼女の存在が世間へのアピールになると考え、「蟻の街」に迎え入れ、また彼女についての記事や著作も多数残した<sup>8</sup>。

「蟻の街」が特殊だったのは、バタ建場と拾い人の支配（従属関係）を否定した点にある。資源回収の協同組合を作り、「蟻のように働き、蟻のように蓄えて、一日も早い協同の楽しい『蟻の家』をもてるようになろう」という理念を掲げていた<sup>9</sup>。

55 年秋、「蟻の街」は東京都から立ち退きを命ぜられる。代わりにの土地として東京都の埋め立て地である八号地が斡旋されたが、2500 万円を即金で払うという条件が厳しく、値引き交渉が続いた。58 年に、1500 万円を 5 カ年の年賦払いをするという条件で合意し、「蟻の街」結成から満 8 年を経て隅田公園から立ち退いた。1988 年に「蟻の会」はその役目を終えたという合意のもと、解散した<sup>10</sup>。以上が「蟻の街」の簡単な説明だが、次は、この集団が存在した頃の時代背景を確認したい。

## 2.2 広がる格差とスラム街

「蟻の街」が作られた 1950 年代を表す有名な言葉は、「もはや戦後ではない」（1956 年の『経済白書』）である。この言葉は、この年に日本経済が、様々

<sup>7</sup> 松居桃楼『蟻の街のマリア』（1958 年）の書著プロフィールによると、松居は「進駐軍くず物資の回収、丹沢山の開拓、世界連邦建設同盟のしごとなどをしたのち」に「蟻の街」に住みだしたという。またそれまでの著作として『市川左団次』（武蔵書房、1942 年）、『貧乏追放』（産経経済新聞社、1956 年）があった。

<sup>8</sup> 松居が北原に対して持った心情の変化は、先述の個々の手記や映画の脚本で微妙に異なる。いくつかの手記では最初から不承不承北原を誘ったとあるが、映画脚本では当初から宣伝に便利な存在として誘ったという設定となっている。よって細かな真相は不明であるが、松居が北原を広告塔として見ていたことは、どの資料を見ても共通している。

<sup>9</sup> 松居、1953 年、27 頁。

<sup>10</sup> 「蟻の街」の成り立ちや実態については、松居（1953 年）や、岩田（2017 年）、及び各新聞記事等を参考にまとめた。また、「蟻の街」の他にも、上野寛永寺内の葵部落、「葵会」も、同じくバタヤの協同組合を持っていたことが知られている（岩田、100 頁）。よって、バタヤの共同組合は「蟻の街」に限らなかったが、北原怜子の存在によってより注目された組織であったとは言えるだろう。

な指標において戦前の水準を上回ったことを示していた<sup>11</sup>。大戦末期から敗戦の過程で日本経済が壊滅的打撃を受けたため、格差は一時的に縮小した。しかし敗戦から10年が過ぎると、生活水準が戻りはじめ、格差もまた開いていく<sup>12</sup>。その最下層に属したのがスラム街住人である。「戦災者、引揚者、生活困窮者など戦後の特殊事情が全国的にスラム街をつくった原因」であった<sup>13</sup>。

なお、スラム街が「絶対的貧困」と「相対的貧困」のどちらの内側にあるとかという点も重要だが、筆者はどちらの要素も含むと考える<sup>14</sup>。つまり、敗戦直後には、「健康で文化的な最低限度の生活」を送ることすら困難な「絶対的貧困」状態にあった人が数多く存在し、彼ら、彼女らが集まった場所の一つがスラム街となった。その後、経済復興が進む時代においては、「絶対的貧困」から抜け出し、より快適な場所へ移住する者も出てきた。しかし、かつてのように「絶対的貧困」状態のままの者や、多少所得が向上しても、国の所得平均値に大きく満たない「相対的貧困」状態にある者が、スラム街に住み続けたり、あるいは他の地域からスラム街へ集まったりしていた。このように考えると、スラム街そのものにどちらの要素が強いかという実態は、時代ごとに変化したと言うのが適切だろう。

1964年には東京オリンピック開催が予定されていたこともあり、1950年代に入ると新聞紙上ではスラム街の追放を主張する記事が目立ち始める。新聞見出しの一例としては、「スラム街 都会の『シミ』を追放」というものがあり、スラム街を厳しい口調で非難した<sup>15</sup>。その一方で、スラム街へ出向き住人の世話にあたった若者を賞賛する記事も見られる。ある記事では慶応大学インターン生が、後樂園スラム街において自費で住人を治療したことが賞賛された<sup>16</sup>。また別の記事では、早稲田大学の学生グループがスラム街で勉強

<sup>11</sup> 橋本健二『〈格差〉と〈階級〉の戦後史』河出書房新社、2020年、143頁。橋本によると、「[1955年に]1人あたり実質国民所得、鉱工業生産指数、生産設備の蓄積が、いずれも戦前のピーク時を超えた」という（橋本、143頁）。

<sup>12</sup> 橋本によると、1956年12月に初めて発行された『厚生白書』は「果たして『戦後』は終わったか」というタイトルを掲げ、「当時の日本の深刻な格差拡大傾向」を記した。「企業規模間の賃金格差」が目立ち、「低生産性・低所得の不完全な就業が大量に存在してい」という（同上、146-148頁）。

<sup>13</sup> 『毎日新聞』1960年6月6日朝刊、11頁。

<sup>14</sup> なお、「絶対的貧困」とは、「生活保護基準を用いるなどして最低生活費の絶対額を求めることによって得られた貧困線」以下の状態を指す。これに対し、「相対的貧困」は、その国の「所得中央値との比較によって定められた貧困線」以下の状態だと説明できる（橋本、38頁）。

<sup>15</sup> 『毎日新聞』1959年8月12日夕刊、5頁。

<sup>16</sup> 『毎日新聞』1955年12月13日朝刊、8頁。

会を開いたことが取材されている<sup>17</sup>。

つまり、スラム街は景観問題や貧困問題の文脈でたびたび報道されていた。一例として、『読売新聞』に1950年代に掲載された、日本のスラム街に関する記事の一覧を記載する（表1）。（紙幅の関係で、一紙に限った）。

表1 『読売新聞』（1950年1月1日～1959年12月31日）に掲載された、「スラム街」という文字を含み、日本のスラム街について言及する記事一覧

発行年月日	記事見出し	記事内容
1952. 10. 09	[よみうり寸評]	スラム街対策怠慢への批判
1956. 12. 03	密集街に“母と子”の病院 安産の部屋もそなえ 高松宮迎えてきょう開院式	元スラム街の密集街にある、母と子のための病院の改築完了
1957. 02. 20	[1 1 3 7 4 6 4・ひとびとみなよろし?] = 8 第2種族の嘆き（連載）	第二種公営住宅の住人による批判、スラム街への転落を不安視
1958. 07. 11	スラム街に施策を 姉妹の父殺し、11 参考人が発言／参院社労委	「バタヤ部落」に住む児童の保護について対策を協議
1958. 07. 29	スラム街に愛の施設 6大都市に8か所 来年度からモデル地区設ける	都市のスラム街にセツルメントや生活指導員の配置を計画
1958. 08. 03	[週間レポート] 社会・文化 スラム街に漸く対策	都市のスラム街にセツルメントや生活指導員の配置を計画
1958. 09. 08	[社説] 青少年犯罪にあらゆる手を	スラム街と青少年犯罪の関係
1958. 11. 15	機動隊出動騒ぎ 秋葉原ガード下取こわしに住民気勢／東京都	「バタヤ部落」強制取り壊しにかかる機動隊と反対する住民の衝突
1958. 11. 16	短編小説賞に変わり種 廃品回収業“作家” リヤカーひきひき考える	スラム街に住む屑拾いが短編小説賞に入賞
1959. 02. 09	[社説] 犯罪をなくす努力	スラム街と青少年犯罪の関係
1959. 07. 18	[ダンチ] = 14 少い部屋数に問題（連載）	公団アパートのスラム街化を不安視、団地の家賃が高額すぎると批判
1959. 08. 13	[都市のカルテ] 福岡 駅移し、町	福岡市にあるスラム街と畑の整理

<sup>17</sup> この学生グループは子どもの勉強をみて、クリスマスには大学の劇団を招き一夜を過ごした。住民たちの多くは「最初は『永続きするもんか』と冷たい目で見」ていた。「しかし、学生たちの熱意で子どもが進んで勉強会に集まる」姿を見て大学生らに協力的になったというエピソードが載っており、これは「蟻の街」での北原の行動や、住人との関係とほぼ同じである（『毎日新聞』1957年8月4日朝刊、12頁）。



	の“若返り” 工業化はばむ用水不足	
1959. 08. 26	来年度の首都圏整備事業計画 総額 637 億円 公共住宅には 77 億円	スラム街の不良バラック取り壊しを計画
1959. 11. 24	[非行期] = 13 ブタと同居では心を鬼に少年院送り (連載)	スラム街と青少年犯罪の関係

出典：ヨミダス歴史館を用いて作成

また、1950年代にバタヤの存在や貧困という現象が珍しくなかったのは、小説や映画を見てもわかる。まず、「蟻の街」のように、都市部を舞台とした作品例は次のようなものである。獅子文六原作、渋谷実監督作の『自由学校』（松竹、1951年）は東京が舞台である。自由を求めて職を辞した元サラリーマンが、「ルンペン」の群落に潜り込む<sup>18</sup>。また、早乙女勝元原作の小説『ハモニカ工場』（未来社、1956年）は、井上和男監督作『明日をつくる少女』（松竹、1958年）として映画化された。東京の工場で働く若年労働者が、過酷な労働環境と低賃金に苦しみながらも青春の日々を送る姿を描いている。次に、農村部を舞台とした作品も製作された。無着成恭原作、今井正監督作の『山びこ学校』（八木プロ、1952年）は、山形県の貧しい寒村を舞台に、中学生たちと教員の交流を描いた。また、安本末子原作、今村昌平監督作の『にあんちゃん』（日活、1959年）は、九州の炭鉱町が舞台である。両親を亡くした4人兄弟が、毎日の米にも困る貧困のなかで生き抜く姿を追った。

上記のような時代背景のなか、有名となった貧困の物語の一つが「蟻の街」と北原怜子だった。では、それらはマスメディアによってどのように報道されていったのか。次節で確認したい。

### 2.3 「蟻の街」への注目

本節では、「蟻の街」報道において、専門雑誌から新聞へと広がっていきなから、どのような変化が現れたのかを確認する。結論から言うと、読者層が広範囲に及ぶにつれ、その内容は、貧困とともにある「蟻の街」の現状を伝えるものから、外から見たイメージにまつわるものへと変容していった。

まず、読者層が限られ、それぞれの専門的な内容をまとめた雑誌記事は、

<sup>18</sup> 道で物を拾うバタヤに挑戦する主人公が、背広を着た勤め人らを目の前にすると物怖じして姿を隠すという場面がある。バタヤがいても平然としている勤め人らの様子からは、物拾いが日常の風景であったことが伝わる。また、主人公が羞恥心から身を隠す行動からは、バタヤは世間から低く見られる位置づけであったことがわかる。

「蟻の街」の成り立ちや構造に焦点を当てている。主眼はあくまでも貧困という現象や住民たちの住環境などにあり、北原はそこにある要素の一つであるにすぎない。

雑誌『住宅』では、「蟻の街のマリア」北原怜子さん」は有名だとしつつ、「だが住宅は？（中略）建築基準法も何もあったものではない」「放っておけない住居の現実がここにもある」と、住宅環境の悪さとその改善の必要性を説く<sup>19</sup>。

また、雑誌『更生保護』では、北原への言及がない。「蟻の街」の成り立ちや、住人の生活費、そして屑拾いの方法が徒歩からオート三輪車に変化していることなどを詳しく紹介し、その将来に希望を込めた好意的な記事が載った<sup>20</sup>。

そして雑誌『部落』では、松居桃楼の著書『蟻の街のマリア』を批評する。同書には好意的な批評が多いなか、本記事では批判的である。「スラムについて、どれだけ啓蒙的役割を演じられるだろうか。いずれにせよ、マリアを過大評価することによって、また宗教的な救済を前面に押出すことで、バタヤの内部構造の諸矛盾を看過しないように、眼光紙背に徹して観察してほしいものだ」と苦言を呈す<sup>21</sup>。

これらの分析からわかるのは、記事が好意的であれ批判的であれ、「蟻の街」全体の「紹介」ととどまっているということだ。他方で、報道が北原の賛美に終始することは、スラムの解決へは役立たないという批判もなされていた。特に、雑誌『部落』が指摘したような、「宗教的な救済を前面に押出すこと」が、貧困を社会問題として捉える視点をぼやかしてしまうという指摘は手厳しい。しかし、のちに分析するように、世間の注目が「蟻の街」より北原怜子へ移行したことで、まさにその現象が起きたとも言えるのである。

## 2.4 善と悪の配分

次に、新聞記事へと目を移したい。年齢や性別、そして関心の対象も関係なく多くの人を読む新聞という媒体では、「蟻の街」はどのように報道されたのか。大まかに言うと、そこには二つの対極的な特徴があった。第一の特徴は、貧富の格差を伝える報道において、底辺層にありながら、あるいは底辺層であるがゆえに「神聖」であると伝えられた点である。そして第二の特徴

<sup>19</sup> 『住宅』1953年5号、日本住宅協会、22頁。

<sup>20</sup> 『更生保護』1957年4月号、日本更生保護協会、52-57頁。

<sup>21</sup> 『部落』1958年9月号、部落問題研究所、90頁。

として、復興を遂げる都市において様々な意味でふさわしくなく、排除すべき悪として描かれた点が挙げられる。

第一の、「蟻の街」を「神聖」なものとして捉えた報道は次のようなものである。「二つのXマス・イブ 『アリの街』と盛り場」という記事では、二つの小見出しが載った。一つ目は「170万人の人出 夜通し続いたバカ騒ぎ」、二つ目は、「願いはビル建設の夢 賛美歌に心こめるバタヤさん」である。つまり、クリスマス・イブに「バカ騒ぎ」に浮かれる世間（中流～富裕層）と、それとは逆に静かに祈りを捧げる「アリの街」の住人（下層）という比較だ<sup>22</sup>。同様の記事はその他にも見られる<sup>23</sup>。このように、経済復興によって豊かになった社会では、そのなかで取り残された人びとの可視化が進んだ。そして、浮かれた人びとに警鐘を鳴らす存在として、貧しくとも敬虔に生きるバタヤというイメージが強調された。

そして第二の特徴である、バタヤは撤去すべき悪だと断じる論調の記事は次のようなものだった。「ガンは隅田公園 バタヤ部落撤去を」という見出しの記事では、「どうしたら浅草はより発展するか」というテーマのもと、「台東区議会観光委員と浅草の実態調査を行った慶大生を囲む座談会」が開かれ、「現状の隅田公園は浅草のマイナスにはなれ、少しもプラスではない。アベックや家族づれが歩けない公園では困る」との意見が出たと書かれた<sup>24</sup>。先述のとおり、スラム街全般に対して、景観などの理由から立ち退きを求める報道は少なくなかった。「蟻の街」があった隅田公園も例外でなかったことがわかる。

敗戦直後は、国民の多くが貧しいという圧倒的貧困の時代だった。それが1950年代に入ると、復興も進み、貧困は相対化していく。そのなかで、復興に取り残された「蟻の街」のような貧民街、バラック街は「東京の恥」であり、また貧困層以外の人びとのために土地を有効活用しなければもったいないとして、嫌悪されることもあった。

これらの分析から、次のことが言える。まず、雑誌よりも、受け手が幅広く設定され、紙幅が限られた新聞紙上では、「蟻の街」の紹介はより簡素なものとなった。そのため、クリスマスに祈りを捧げる姿や、平時の汚れた外観

<sup>22</sup> 『朝日新聞』1954年12月25日朝刊7頁。

<sup>23</sup> 「イブの銀座に82万人」という見出しの記事でも、「東京では戦後最高の昨年（307万人）とほぼ同じ延べ300万人の人出」があり、盛り場で人が出た事例と、『アリの町』では、けいけんなイブのミサが新築の礼拝堂で行われた」ことが、対比的に扱われた（『読売新聞』1960年12月25日朝刊11頁）。

<sup>24</sup> 『読売新聞』1954年8月21日朝刊6頁。

といった、外部を覆う一面的な部分に焦点が当てられがちになった。

特に、新聞紙上における上記2パターンの報道からは、「蟻の街」の人びとは「欲にまみれておらず無垢である」というものと、「恥ずかしい存在で追放すべき」というものという、両極のイメージを背負っていたことがわかる。景気向上で浮かれた世相を戒めたい時には善として描き、そうではない平時には悪として描く。つまり「蟻の街」は、その時々読者にとって都合よく善悪のイメージをまともされていたと言える<sup>25</sup>。専門雑誌と新聞報道を比較すると、その内容が前者は深く狭く、後者は広く浅いものになりがちなのはある意味では当然である。しかし、「蟻の街」表象においては、その差があまりに顕著に露呈していた。それは、「蟻の街」に住むバタヤが、貧困の行き着く先という究極の状態であったことも関係しているだろう。貧困者の集団であり、土地を不法占拠して生き延びている互助組織に対しては、大多数の市民からの反応も、好意的であれ敵対的であれ極端な反応になりがちだったからだと考えられるのではないか。

以上は、「蟻の街」の報道についての分析である。その後、「蟻の街」は単なる報道を越えて、演劇や映画という作品で表現されるようになる。次章からはそれらを考察したいが、その際に鍵となるのが先述の北原怜子である。彼女の存在があったからこそ注目されたのが「蟻の街」であった。よって、次は彼女の経歴を確認したうえで、その報道のされ方に注目したい。

### 3. 北原怜子にかかわる言説と表象

#### 3.1 お花屋敷のお嬢様

北原怜子は1929年、東京に生まれた。父は農学博士でのちの高崎経済大学名誉教授、北原金司で、近所から「お花屋敷」と呼ばれるほどの豪邸に住み、豊かな家庭の子として育つ。昭和女子薬学専門学校を卒業後、洗礼を受ける。霊名エリザベス、堅信名マリアだった。1950年、ゼノ修士との出会いをきっかけに「蟻の街」を知り、松居桃楼の誘いで、「蟻の街」のクリスマス会を手伝うようになる。松居はカトリック教徒嫌いで、彼らの慈善事業も、宗教者の気まぐれな施しだと蔑視していた<sup>26</sup>。しかし、ゼノ修士の勧めによって開

<sup>25</sup> なお、同一のものに対し、「聖と俗」を見いだすことについての議論は、メアリ・ダグラスが『汚穢と禁忌』（筑摩書房、2009年）で行っている。それは、日本の事例にも当てはまると考えられるが、そのような理論は一般論にすぎないとも言える。メアリ・ダグラスは人類学的視点から論じているが、本稿ではあくまでも経済格差によって生じた視線のあり方に焦点を当て、1950年代の日本社会に固有の力学を解明したい。

<sup>26</sup> 松居は、カトリックへの嫌悪感を繰り返し述べている。彼自身は仏教徒であったが、だから

催が決まったクリスマス会の指導者がいないというタイミングが重なり、北原を世話役として誘った<sup>27</sup>。そのクリスマス会は新聞でも取り上げられている。「蟻の街」に尽くしたいという北原自身の願いと、彼女を広告塔にすれば「蟻の街」を世間にアピールできるという松居の思惑が重なり、その後も北原は「蟻の街」で子どもの世話をするようになる。1958年、北原は肺結核により28歳の若さで死去した。

では、彼女に関する当時の報道はどのようなものであったのだろうか<sup>28</sup>。

北原がメインとして登場したのは、52年の記事「命安かれ 互いに祈り合う 死刑囚戦犯と“アリの街の天使”」（『毎日新聞』1952年6月5日）である。当記事は、フィリピンのモンテンプル刑務所に入っていた元海軍の死刑囚が、前年51年11月11日号の『サンデー毎日』に載った北原怜子の活躍を伝える記事を読み、それに感激して北原へ手紙を送ったことが元となっている<sup>29</sup>。この記事からは、北原が、全国紙の雑誌や新聞記事でメインで取り上げられるほどの注目を集め出していたことがわかる。

とって仏教を広めようと積極的に行動に移した様子はない。ただ、「共産党員とクリスチャン」は「自我ばかりを主張して、他を頭から否定しようとする」として、忌み嫌っていた。特にカトリックのある神父が、生活のために泥棒をしてしまったバタヤを、救うどころか否定したという出来事があり、カトリックに対する印象がことさら悪かったことを述べている（松居、1953年、129-134頁）。

<sup>27</sup> 松居は、北原が「蟻の街」を訪ねてきたと伝え聞いた頃のことを振り返り、次のように書いている。「大体松居桃楼はクリスチャンという人種はあまりすきでない。そのうえ、女のクリスチャンときたら鼻もちならないものと断定していたのだから、そんな野次馬にかまっている暇はないと、それっきり忘れてしまった。ところが、いよいよクリスマスの演出で、せっぱつまった挙句に、どうにもならなくなったので」北原に演出役を依頼した（松居、1953年、86頁）。

<sup>28</sup> 本稿では、北原の知名度と「蟻の街」の知名度の関係も考慮に入れたいため、「蟻の街」というワードで新聞記事を検索し、それらのなかで北原の名前を探した。1950年代に限り「蟻の街」「蟻の町」「アリの街」「アリの町」で検索すると、『毎日新聞』（検索サービス「毎索」を利用）では26件、『読売新聞』（検索サービス「ヨミダス歴史館」を利用）では19件、そして『朝日新聞』（検索サービス「聞蔵Ⅱビジュアル」を利用）では14件の記事が見つかる。

なお、「蟻の街」に関する最初の記事には北原の名前は記載されていなかった。それは、北原が初めて「蟻の街」に関わるきっかけとなった、50年開催のクリスマス会の記事であったが、手作りの煙突と、その前に並ぶ6人の子どもの写真が掲載された。写真のなかにも北原の姿はない（「“アリの町”の子供のXマス」『朝日新聞』1950年12月19日東京版朝刊、2頁）。ただし、松居の著作では、クリスマス会の現場で「新聞社やニュース映画のカメラマンが、その周囲を右往左往して撮影している」とあるので、筆者が見つけたもの以外の資料に北原も写った写真などが存在している可能性はある（松居、1953年、88頁）。

<sup>29</sup> 当記事によると、北原は死刑囚からの手紙に強く心を動かされ、その後死刑囚戦犯のために「助命祈願祭」を開いたり、死刑囚へ慰めの手紙を書いたりした。しかし、その後体調を崩し、手紙のやりとりが滞った。死刑囚が松居に連絡を取り、北原の病状を知って、「私たちのために悪化した」と心を痛み、彼女の回復を祈ったとされている（『毎日新聞』1952年6月5日東京版朝刊、3頁）。なお、該当する『サンデー毎日』1951年11月11日号は現時点では入手不可のようである。

その後は北原の名前は全国紙の新聞報道ではほぼ見かけなくなる。しかし、再び彼女は大きな注目を集め始める。それは、彼女の訃報記事においてだった。例えば 1958 年 1 月 25 日、『朝日新聞』では「蟻の街のマリア」死ぬ 奉仕に生きた 9 年間 バタ屋さんら、きょう会葬」という見出しで、彼女の功績が讃えられた<sup>30</sup>。その後も北原は、彼女の墓ができた時や、胸像ができた時、また 4 年後の命日などに、頻繁に報道されるようになる。その他、松居の書籍紹介や、「蟻の街」の取材などがあるたびに、彼女の名前は頻繁に登場した。以上のことから、少なくとも全国紙が北原に熱心に注目し始めたのは北原の死去直後からだったと言える。それは、北原が生前行った地道な慈善活動以上に、彼女が「夭折した」という悲劇性及びドラマ性が人びとの興味をひいたからだと理解できる。その点については、次節で確認する雑誌報道でより鮮明となる。

### 3.2 進む「美談」化

1958 年に松居が『蟻の街のマリア』を発表し、その書評が載る頃から北原の名前は度々紙面に載った。興味深いのは、若年層、あるいは少女向けの雑誌に、北原の生涯が積極的に取りあげられたことだ。それらの見出しからは、北原を「聖女」としてあがめる視線が見受けられる。雑誌『中学二年コース』では、「蟻の街のマリア バタ屋部落に若き生きがいを与えた北原怜子さん」「バタ屋の子を助けるには、自分自身がバタ屋の娘になりきるよりはない。そう北原さんは決心した…」と特集された（写真 1）<sup>31</sup>。また、別の雑誌『少女ブック』では、後述する東宝芸術座公演「蟻の街のマリア」の紹介をかねて北原怜子の生涯が紹介された。見出しには、「わが身をぎせいにして 人びとのしあわせにつくしたうつくしいお話」「怜子は袋をかついで、くずひろいにもでかけるのでした」といった言葉が書かれている<sup>32</sup>。

写真 1 「蟻の街のマリア」特集記事



出典：『中学二年コース』1958年4月号84-85頁

<sup>30</sup> 『朝日新聞』1958年1月25日東京版朝刊、12頁。

<sup>31</sup> 『中学二年コース』1958年4月号、学習研究社、84頁。

<sup>32</sup> 『少女ブック』1958年9月号、集英社、96-99頁。

このような見出しからは、新聞、雑誌ともに、北原を「手本にすべき、清らかで優しさに満ちた女性」という視点で描いたことがわかる。彼女の生涯は、大人のみならず、子どもの教育的手本としてもふさわしいと、マスメディアが判断したのだと言える。また、生前より死後のほうが大きく報道されたということは、病身を顧みずに「蟻の街」に尽くしたことに加え、28歳という若さでこの世を去ったという結末の付加が、「美談」としてもはやされたことを意味するのではないか。

北原は富裕層出身なのにもかかわらず貧困者に尽くしたことだけでなく、若い女性で、しかも病弱であったという様々な要素が重なり、メディアで注目された。「美談」としての性格が強いほど、「蟻の街」の報道は、北原個人への賞賛と感動という消費でとどまりがちになる。そしてそれは、貧困問題そのものへの視点が欠ける要因にもなりうる。社会問題を訴える時の要素として、一個人に焦点を当てる際に生じる功罪が、「蟻の街のマリア」の流行には浮かび上がっている。

「蟻の街」そのものは舞台としてとらえ、それよりも北原の行動に焦点を当てて「美談」化する流れは、その後に作られた舞台や映画にも見られた。次節では、舞台の特性や評価について分析を行う。

### 3.3 舞台の上の清らかな女性

1958年6月、劇作家の菊田一夫が脚色した舞台『蟻の街のマリア』が芸術座で上演された。新聞紙上では「浅草言問橋の近くにあるバタ屋の集落“蟻の街”に、献身的な愛の奉仕を続けた故北原怜子さんの実話を劇化したもの」と紹介された<sup>33</sup>。この説明からは、劇の焦点は「バタヤ部落」という貧困集団そのものではなく、その集団に尽くした北原怜子にあったことが読み取れる。

新聞紙上の批評はおおむね高評価だった。褒める理由としては、北原の心の清純さを挙げたものが多い。「“蟻の街”が舞台で、クズものやムシロが散乱しているのだから汚いが、そこに演じられるものは心のアカを洗いきよめてくれる美しいものである」といったものが代表的だ<sup>34</sup>。他にも、「清純な感動を呼ぶのは、“人間愛”という大きなテーマで貫かれているからだろう」という評があった<sup>35</sup>。

<sup>33</sup> 『朝日新聞』1958年7月4日東京夕刊、2頁。

<sup>34</sup> 『読売新聞』1958年7月2日夕刊、5頁。

<sup>35</sup> 『朝日新聞』1958年7月4日東京夕刊、2頁。

ただし、北原怜子を演じた八千草薫の役柄については、清らかさ以上のものが感じられないという批判も目立つ。例えば、「八千草薫のヒロインは柄を生かして力演しているが、これでもう一つ意志の強さというようなものが出たら申し分ない」という批評が載った<sup>36</sup>。また、「八千草は柄にはまって適役だが、清潔な感じが濃くて弱々しく精神的な面の強さといったものに不足している」というものもある<sup>37</sup>。

北原像への好感と批判は、清らかさを讃えつつも、精神面での強さの過度な欠如が不自然に映ったことを示している。北原の清純さのみを強調し、彼女自身が本来持っていた負の感情や意志の強さを薄めた演出は、その後撮られた映画にも引き継がれる。次章では、「蟻の街」の流行のなかで製作された映画『蟻の街のマリア』について、男性の介在、そして北原像の変化という視点から考察したい。

## 4. 映画『蟻の街のマリア』の誕生

### 4.1 男性の介在

映画の原作は、松居が書いた『蟻の街のマリア』（知性社、1958年）だ。つまり、原作の時点で、それは北原自身の思いそのままというよりは、松居という男性の目線が介在したものだ。では、北原本人の言葉はどこで見つかるかという、それは北原の唯一の著書『蟻の街の子供たち』ということになるが、本書も北原が残した文章を松居が編集したものであった。あとがきで松居は次のように記す。

彼女には妙な癖があって、気がむくと驚くべき超スピードで長い手紙をかかすが、投函しないでおいて最後には焼きすててしまうのだ。だから思いがけない時に、二三年前の未投函の手紙が、本の間や、机の引出しから出てくることがある。実はこの「蟻の街の子供たち」の書翰集も、昨年冬、何かの間違いで、ほかの紙屑と一緒に蟻の街に送られてきた中から、運よく私が拾いだしたのだ。<sup>38</sup>

〔出版に関して〕彼女は絶対に不承知だったが、「世の中のため、というより天主様のために」と八方から懲罰されて、遂に「一切の責任は

<sup>36</sup> 『読売新聞』1958年7月2日夕刊、5頁。

<sup>37</sup> 『朝日新聞』1958年7月4日東京夕刊、2頁。

<sup>38</sup> 北原、222頁。



松居が負う」という条件つきで話がまとまった。<sup>39</sup>

この文章からは次の二点を指摘することができる。第一に、北原は自ら多くの文章を残していたので、本来ならば男性の手を介さずともそれらは記録として世に残っていたかもしれないということ。第二に、実際には松居という男性の手で編集され、残されたということだ。

ここにはいくつかの要因が重なっている。まず、北原は自分の存在を周囲に誇示することを苦手としていた。それは、彼女が『蟻の街の子供たち』刊行に関し、当初は「絶対に不承知だった」ことからわかる。また、自分が「蟻の街のマリア」として脚光を浴びることに不快感を抱いた事実は、原作でも映画でも、物語の重要な要素となっている。彼女が自己顕示を好まなかった資料は他にも存在する<sup>40</sup>。よって結果的に、北原が書いた貴重な記録を残す役割は、傍らにいた松居が負うこととなった。

そして、元来、松居という人物が、執筆活動に熱心だった事実も無視できないだろう。彼は先述の通り高名な劇作家の息子であり、自らも「元松竹専属の作家」であった<sup>41</sup>。貧困層、特に「蟻の街」の住人を救うことに使命感を抱いていた彼は、街での直接的な指導に従事しつつ、本を書いて発表するという方法で世間に貧困という社会問題を提起しようとした。それはたとえ北原の存在がなくても実行に移していた可能性が高い。だが「大学教授のお嬢様」という、世の耳目をひきやすいアイコンが現れたことで、より一層執筆活動は盛んになる<sup>42</sup>。

松居は、北原の原稿を編集することで、著者名は北原だとしても、自分の視点を活かして『蟻の街の子供たち』を世に出せた。本書の刊行は北原の死去前であったので、彼女も原稿に目を通しただろうが、どの書簡をどの順番で載せるかという選択、見出しの付け方、そして誤字脱字等の調整は松居が

<sup>39</sup> 同上。

<sup>40</sup> 松居は『蟻の街のマリア』編集時に新聞社より取材を受け、本書に載せる写真に言及し、「怜子さんは写真ざらだったので集めにくい…」と語っている（『朝日新聞』1958年2月12日東京朝刊、10頁）。

<sup>41</sup> 『毎日新聞』1951年11月10日東京朝刊、4頁。

<sup>42</sup> 松居は1963年出版の『アリの町のマリア 北原怜子』（春秋社）に「私は、ただ北原怜子さんの徳を讃えるだけや、アリの町の自慢をするために、『アリの町のマリア・北原怜子』を書いたわけではありません。あなたの家庭で、あなたの学校で、あなたの職場で、あなたの町で、あなたの国で、そしてこの地球上の全人類のために、あなたこそ『マリア』になっていただきたいからこそ書いたのです」と記している。北原個人を讃えるためだけでなく、また、「蟻の街」への注目を集めたいだけでなく、北原のような慈悲深さを人びとに広めたいという目的があったのだと考えられる。別の言い方をすれば、松居が目指す寛容な社会の実現を世に訴える際に、北原の生涯は格好の題材となったということだろう（2頁）。

行ったと推測できる。

あるいは、映画原作となる『蟻の街のマリア』ではよりはっきりと松居自身が書き手となり、北原を主人公とした「蟻の街」の物語を執筆した。北原の心情や台詞を中心とした本書は、『蟻の街の子供たち』での内容と、松居が自身で見聞きした情報及び解釈を合わせて書かれたものである。

つまり、各書籍でも、それを元にした映画でも、北原自身の表象は男性の松居の手によったことは覚えておかなければならない。それは偶然に北原自身が自己表現を苦手としたことも原因ではあるが、果たしてそれだけですませてしまっているのだろうか。そこには、男女の性別役割分担意識が表れているとも言えるだろう。

「蟻の街」に通い出した頃、住人に冷たくあしらわれた北原が、もし自分の手で何かを発表していたとして、それが松居の時のように歓迎されたのだろうか。そこには疑問符が残る。日々の奉仕活動を超え、言葉にして世に発言する時に、女性だという条件が不利に働いた可能性は否定できない。「蟻の街」の流行を見た時に、もっとも目立つのは女性の北原だが、その物語の枠組みを作り発信していたのは男性だという事実もまた忘れてはならないと考える。

次節では、上記のような性別役割分担を意識しながら、当時に理想とされた女性像について検討する。

## 4.2 素直な女性、寄り添う女性

『蟻の街の子供たち』の「序」では、法学者の田中耕太郎が次のように述べる。北原の記録について、「それは才筆といえるが、むしろそのたんたんたる叙述の中によさを見出すのであり、とくにすぐれて芸術的というべきほどのものではない」<sup>43</sup>。このような評価は、日本近代文学の研究者、中谷いずみが指摘したような、社会が若い女性に求めた理想像に沿っているのではないか。中谷は、『綴方教室』（中央公論社、1937年）において、豊田正子という少女が「技術とは対極にあるような、いわば『いきなり書き初める様な素直さ』が称賛され」と指摘する<sup>44</sup>。北原と豊田、両者の文章は技術面では評価されにくかった。一方で、「たんたんたる叙述」や「素直さ」という点において人びとに評価されていたことがわかる。豊田の例は少し時代を遡るが、

<sup>43</sup> 北原、1頁。

<sup>44</sup> 中谷いずみ『その「民衆」とは誰なのか ジェンダー・階級・アイデンティティ』（青弓社、2013年、87-88頁）。

主に男性を中心とした社会から、女性へ要求された条件が、1950年代の北原にも当てはまっていたと言える<sup>45</sup>。

また中谷は、木下恵介監督作『二十四の瞳』（松竹、1954年）を一例として、1950年代当時の女性には、「泣く」姿をもって世間へメッセージを送る態度が多く見られたことを指摘する<sup>46</sup>。『二十四の瞳』は反戦映画の代表作の一つとされる<sup>47</sup>。しかし、本作では戦場や兵士といった描写はほとんど見られない。むしろ、戦争も一因となり人びとを苦しめた貧困の描写が主であることは、社会学者の福間良明によって指摘されている<sup>48</sup>。本作で高峰秀子が演じる女性教師は、受け持つ生徒が困難にぶつかる度に涙を流す。戦争や貧困というものの制度的な解決を試みるというより、不幸な境遇にある者に寄り添い、ともに悲しむという役割を担っているのである。これは、北原怜子が、格差や貧困を生み出す社会システムの改革を担うよりも、バタヤたちとともに生活し、苦しみを分け合い、慰め合うというスタンスに近い。

1930年代に評判になった女性の書き手である豊田正子や、1950年代に大流行した『二十四の瞳』の女性教師。彼女らに与えられた女性像は、高度な技術を持たないが、素直であり、貧しさにもめげず、弱者に寄り添う優しい心を持つ人というものだった。これらの女性像は、北原怜子に与えられたイメージにもほぼ当てはまる。北原は富裕層の出身だという点で彼女らとは違っているが、それすらも「富裕層出身なのにもかかわらず弱者に優しい」という、優しさを強固にする材料になっている。

このように、1930年代から1950年代に賞賛された女性像は、いわゆる「聖女」のイメージであった。この「聖女」像を際立たせる人物として、松居を

<sup>45</sup> なお、豊田正子が『綴方教室』に掲載された文章を書いたのは、彼女が小学校高学年の頃である。よって、社会が豊田に期待したのは、女性というより子どもという属性にまつわるイメージだったと言うこともできる。大正時代に成立した、社会が子どもに「無垢さ」や「純粋さ」を求める態度に関しては、河原和枝『子ども観の近代—『赤い鳥』と「童心」の理想』（中央公論社、1998年）に詳しい。ただし、豊田が「少年」ではなく「少女」であったこともまた事実である。本稿では、彼女の属性が女性であった側面に、より焦点を置いた。

<sup>46</sup> 中谷は、『二十四の瞳』が公開された1950年代頃には「女の『泣きみそ』ぶりと結び付いた『平和』の訴えがしばしば見られ」とし、本作公開の翌年に開催された第一回日本母親大会では、報告者が戦争の苦しみと「平和」の大切さを泣きながら語ったことや、参加者もそれに呼応して泣いたことを指摘している（中谷、220頁）。

<sup>47</sup> 映画評論家の佐藤忠男は、『二十四の瞳』は「興行的にも大ヒットを記録して文字どおり日本中の老若男女を泣かせ」、「戦後の日本人の平和主義のシンボルとな」ったと記している（『増補版 日本映画史2』岩波書店、2006年、288頁）。

<sup>48</sup> 福間は、『二十四の瞳』の「描写の多くは、あまりにも悲惨な小漁村の貧困に充てられている」と説明する（福間良明『働く青年』と教養の戦後史——「人生雑誌」と読者のゆくえ』筑摩書房、2017年、110頁）。

挙げることができる。松居は、北原と同様に、「蟻の街」の外部から来て住人らを助けようとした者だ。しかし、彼に与えられた役割は北原とは対照的でもある。手記や映画に共通するように、松居は初めから先生と呼ばれ、住人から慕われ頼りにされている。しかし、「蟻の街」に参加するにあたり、北原のように排外的態度をとられた経緯は見られない。住人への指導や、東京都との交渉といった指導者的役割を当初から順調にこなしている。

それは、手記に記されていないだけなのか、あるいは松居が北原よりも慎重に「蟻の街」の人びとと関わっていたからなのかまではわからない。ただ、男という性が、彼の指導者としての立ち振る舞いを容易にしたことは想像できる。そこには、住人を啓蒙し指導する男性の松居と、住人に寄り添う女性の北原という構図があった。それは各人の希望が偶然そうだったというだけでなく、社会が性的役割としてそのような構造を望んだ結果であった可能性も否定できないのではないか。

では、上記のような原作、そして女性観が下敷きとしてあった上で、映画の内容はどのようなものとなったのか。次節で考えたい。

#### 4.3 五所監督が描く「美しいドラマ」

まずは、本作の梗概を確認したい。

1950年、隅田川のそばの「バタヤ部落」、「蟻の街」に北原怜子が現れる。力になりたいという彼女に対し、金持ちの気まぐれとしか思わない住人は冷たかった。特に、先生と呼ばれる松木という人物（松居がモデル）は、カトリック教徒である彼女の行為を偽善と感じ、北原を嫌悪した。しかし北原は子どもの世話係として徐々に街になじんでいく。実家から通うのみならず、自らがリヤカーをひいてバタヤになりきったところから、「蟻の街」の子どものみならず彼らの親からも信頼を得始める。しかし彼女は肺病を患い、サナトリウムで養生することとなる。一年後に「蟻の街」に戻ると、そこではすでに新しい女性が子どもの世話をしていた。その上、松木から「あなたは『マリア』という役の女優に過ぎない。出番は終わった」との旨の言葉を聞き、無念のうちに街を去る。しかし病は重症化し、最後を「蟻の街」で迎えたいという願いとともに、北原は街に戻る。その頃「蟻の街」は行政から立ち退きを迫られ、金額交渉が難航していたが、彼女は病床からその交渉がまとまることを祈り続けた。そして、「蟻の街」が無事、希望価格で移転できるようになったという報を受け、北原は安らかに永遠の眠りにつく。

以上が映画のあらすじである。現実の北原怜子は1958年1月23日に死去

した。同年6月に先述の舞台が、そしてその6カ月後の12月に映画『蟻の街のマリア』が公開された。北原の死後すぐに作品化されたということは、流行りものとしての色も多分にあったことがわかる。その事実、映画批評を積極的に行っていた水谷憲司も指摘している<sup>49</sup>。

本作を監督した五所平之助は、製作に当たって次のような意気込みを述べていた。「現代の人間からうすれてゆく純粋さへのあこがれを浮かび上がらせ、人間に対する主人公の底抜けの愛情を軸として、社会のあらゆる層に訴えるような美しいドラマにしてみせる」<sup>50</sup>。つまり、五所平之助は、バタヤという貧困層の描写やそれに対する問題意識よりも、北原の「純粋さ」と「愛情」に焦点をあてた「美しいドラマ」にしようとしていたことがわかる。では、五所平之助とはどんな人物であり、その作風はどのようなものであったか。

五所平之助は1902年に東京で生まれた。神田の大きな商店の息子として裕福な家庭で過ごす。彼は妾の子で、父の本妻の子が死んだため、跡取りとして5歳の時に商店にやられた。実母は1918年、37歳で死去した。また、弟は小児マヒの後遺症で足をひきずっており、1928年、20歳の時に肺炎で死去した。つまり、長男の自分だけ裕福な環境で育ち、実母と弟、妹たちはひっそりと生きたという感覚を持っていた。佐藤忠男は、五所が、このような経歴を持っていたからこそ、薄幸の女性や、身体障害者（盲目の少年、足が不自由な娘等）の登場する映画を多く撮ったのだらうと指摘する<sup>51</sup>。1923年、松竹蒲田撮影所に入り、島津保次郎の助手をつとめ、25年に監督に昇進した。代表作は『煙突の見える場所』（スタジオ8プロ＝新東宝、1953年）、『大阪の宿』（スタジオ8プロ＝新東宝、1954年）などである<sup>52</sup>。

こういった経歴や作風から、五所が『蟻の街のマリア』に関心を持ったのは自然な流れだと考えられる。社会的弱者や薄幸の女性を描くのを好んだ五所にとって、バタヤという最貧困層の集団と、そこに生涯を捧げた北原は興

<sup>49</sup> 水谷憲司は『映画監督 五所平之助』の中で次のように述べる。「歌舞伎座プロが映画化権を獲得するまでには、北原怜子のことが新聞や放送で話題をよんでいたもので、映画会社のあいだではげいせりあいがあったようだったが、最終的に原作者の松居桃楼が五所監督をたてたこのプロの企画へ依頼しておちついたわけである」（永田書房、1977年、194頁）。

<sup>50</sup> 『読売新聞』1958年9月29日夕刊、5頁。

<sup>51</sup> 佐藤は五所平之助の作品の特徴として次のように書く。五所は「不幸な母子兄弟のなかで、自分一人が父の家の跡とり息子として大事にされてしまったということに」負い目を感じ、弟への思いから「心身障害者をしきりと登場させ」、また母への思いから「妾、あるいは芸者をヒロインにした映画をじつにたくさんつくった」（佐藤忠男「五所平之助論」佐藤忠男編『お化け煙突の世界 映画監督五所平之助の人と仕事』ノーベル書房、1977年、62頁）。

<sup>52</sup> 五所平之助のプロフィールは、五所平之助『わが青春』（永田書房、1977年）、佐藤（1997年）を参考にまとめた。

味をひかれる題材だったろう。注目したいのは、五所が本作の焦点を北原に当てており、バタヤとしての生活を強られる人びとを生み出す社会への批判は後景に押しやられていたことである。観客には、北原の善行をとおして、社会にある格差というひずみに関心を持ってもらおうという狙いはあったかもしれないが、あくまでも北原の献身的な愛の奉仕を描くことを一番の目的としていたことが、先のインタビューからもわかる。

そのような五所の態度は、彼が、声高に社会改革をうたうのではなく、人びとの日常を静かに見つめる作風を好んでいたからだとも言える。だが同時に、のちに触れるように、スラム街を正確に描くものよりも、一女性の感動的な物語のほうが世間の理解を得やすかったという社会構造も無視できないのではないか。原作自体が、お嬢様である北原が「バタヤ部落」に奉仕し早世するという物語を強調した松居の著作だったので、映画もそれを忠実に映像化しただけだとも言える。とはいえ、松居も五所も「蟻の街」を表現する時に、北原の美しい物語として解釈することを選んだことは、当時の貧困表象においてその方法がもっとも世間に受けたという現実を示しているのではないか。

では、五所監督の態度を確認したところで、次は映画への批評を分析したい。

#### 4.4 感動と戸惑い

映画『蟻の街のマリア』への批評にはどのようなものがあつたのだろうか。こちらも、舞台版と同様、北原の行動に感動した一方で、彼女の本心が伝わってこないという意見が多く見られた。評論家の宮睦夫は、北原の言動は「世俗を越えた美しいものであり、感動をさそう」としながら、「さてマリアがどうして奉仕の対象として蟻の街を選んだのか。これが映画だけでは、はっきりつかむことができない。(中略)“なぜ”“どうして”とそんなしらじらしい思いが、先にたつのだ」と評する<sup>53</sup>。またドイツ文学者の会津伸は「主演女優(千之赫子)が終始一貫して、なかなか好演、原作のマリア・怜子の気持を汲んで、あらゆる表情と仕草において、きめこまかくしかもつよく、精一杯の演技は、役柄とはいえ、気持よかった」としつつ、「なぜ彼女が有りの町に来なければならなかったか、その献身の内的動機づけは、ほとんど説明不足といってよい」と記した<sup>54</sup>。

<sup>53</sup> 宮睦夫「食い足らぬ筋 『蟻の街のマリア』」『毎日新聞』1958年12月11日、2頁。

<sup>54</sup> 会津伸『『蟻の街のマリア』について——その演劇と映画をみたのちに——』『かぐのみ』1959

映画では、北原が突如「蟻の街」を訪れる場面から始まる。実際には、直前にゼノ修士と偶然出会いこの街のことを知らされるといういきさつがある。また、カトリック教徒として社会に貢献したいという思いを日頃から抱いていたという背景があった。しかし映画ではそういった場面がなく、また後から詳しく説明が入るわけでもないで、なぜ北原が「蟻の街」にたどり着き、そして人並み外れた献身さで「蟻の街」の子どもたちの世話をみるのかがわからない。偶然に「バタヤ部落」を見かけ、人びとを助ける使命を感じたという台詞が短く入るだけである。大筋では、北原が心の優しい人だからだという、ただそれだけの説明で処理してしまっている。

そして本作が重点を置くのは、北原が「蟻の街」救済に従事する姿だけではない。北原の行動は、カトリック教徒であり裕福な家の娘の酔狂だと見る松居に注目し、彼と北原との確執と、その後の和解の物語も強調された<sup>55</sup>。そうすることで、安易な「宗教映画」、あるいは「お涙ちょうだい映画」を越えたものになった点は興味深いが、北原は徹底して心優しく美しい女性と描かれている。内に秘めた情熱や葛藤は、原作と比較しても意図して削られていた。では、実際の北原怜子はどのような人物だったのか。次章で考察したい。

## 5. 北原怜子の実像

### 5.1 怒りの消去

北原怜子の実像を正確に知るのは困難である。先述のとおり、彼女には自己顕示欲があまりなく、進んで自伝を残すような行動はとらなかったからだ。ただし、松居の編集であるとはいえ、北原の手記をもとにした『蟻の街の子供たち』は、彼女の姿を知るのにもっとも適した資料である。本書には、雑誌記事や舞台、映画からは除かれた北原の強情さといった側面が垣間見られる。なお、「聖女」としてのイメージとは異なる北原の本来の姿を分析するの

---

年4月号、かぐのみ社、3-4頁。

<sup>55</sup> 『蟻の街のマリア』の脚本家・長谷部慶治は次のように記す。「北原怜子さんのお話は、既に世界的に有名になっていて、全くの虚構として描こうと考えていた私も、その実話を無視するわけにはいなくなっ<sup>ママ</sup>た。そこで、原作にあった、「松井氏が『蟻の街』を、いろんな迫害から守るために宣伝劇を計画し、北原怜子さんを女優になって貰ったのだと書かれている処に映画的なものを感じ、筆をおろしてみたのですが、勢い北原さんの美しいヒューマンイズムが影を薄めてしまったのではないかと、出来上がった結果を不安に思っている次第であります」(長谷部慶治「脚色者の立場から」『シナリオ』1958年第14巻第11号、シナリオ作家協会、125頁)。実際に映画では、松居が北原に対して抱く拒絶感と、彼がそれを乗り越えて北原を全面的に受け入れるまでの過程が強調して描かれている。

が本章の目的であるが、それは、北原の行動そのものを貶めるものではない。あくまでも、報道や映画化作品の裏で巧妙に隠されてしまった可能性のある側面を分析することを目指している。

まず見られるのは、他の同世代女性に対する嫌悪感だ。例としては次のようなものが挙げられる

菓専に入ると、全国各地から色々のお嬢さんが集まって来ておりました。そのなかで、田舎からいらっしゃった方たちは、まるで都会へ出たら、何んでも派手な服装をしなければならぬという規則でもあるかのように、急に、けばけばしい化粧をし、男の人たちとの交際なども、大変開放的なものとなりました。(中略) 私は、そういうお友達や、みだらな男の学生を見る度に、それとは別に、何か淨く美しいものに憧憬れる気持ちが、もっともっと強くなってまいりました。<sup>56</sup>

北原は、経済的格差が顕著に現れだした世の中において、「けばけばしい化粧」をする軽薄な女性たちに敵愾心を抱いていたことがわかる。このような感情を含む文面は他にもしばしば登場する<sup>57</sup>。しかし、戦争をくぐり抜けてようやく自由を手に入れ、青春を謳歌しようとする男女の姿はそこまで糾弾されるべきものであるだろうかという疑問も湧く。北原が抱いた敵意は見方によっては一方的であるとも言えないだろうか。しかしそれは、彼女自身がまだ若く経験が足らなかったことや、あふれ出る正義感の強さが過剰反応を起こした結果とも言える。そしてこのような心理になるのは不自然ではない。むしろ彼女が喜怒哀楽を持つ一人の若い女性だったことが生き生きとわかる文面である。しかし、怒りを表すこのような側面は、映画を含めた様々な報道からは削がれた。

彼女が怒りの感情を示す場面は他にも登場する。例えば、子どもたちを指導する際には幾度も憤りを覚え、それを態度に表している<sup>58</sup>。バタヤの子ど

<sup>56</sup> 北原、17頁。

<sup>57</sup> 同年代の女性に対する嫌悪は、次のような文面も見られる。「あの国際劇場から六区にかけて流れるように歩いている綺羅びやかな若い人たちの浮かれた顔つきを見ると、一体この人達は何を考えているのだろうかと軽蔑したいような敵愾心が起って来て、そのおかげで、疲れはてていた身も心も一偏に引きしめるような思いがしてくるのが常でした」(北原、49頁)。

<sup>58</sup> 例えば、ドラム缶での入浴時に何度注意しても騒ぐのをやめない子どもたちには、「しゃくにさわって、ホースの水を一せいにあびせかけてやりました。子供達はびっくりしてしまって、それ以来浴場で歌を唱わなくなりました」(北原、117頁)という記述がある。また、「蟻の街」に住んでいた宮坂源一という少年の作文では次のような文章がある。言うことを聞かない宮坂



もらが、貧しさに由来する教育の欠如と、周囲から浴びせられる差別の視線から、外の世界から来た北原に従順でなかったことは原作でも映画でも描かれる。そして北原は彼らへの対応に苦慮する。しかし、北原の手紙や子どもの作文で示されたような、北原が直接的な怒りをあらわにする場面は、映画では削除された。

また、バタヤという、世間から蔑視されていた行動をとる際の戸惑いも、映画からは消去された側面である<sup>59</sup>。富裕層出身の北原が、物拾いをするに最初から戸惑わないほうが不自然なのであるが、手記に記された複雑な心境は、映画では見当たらない。最初から積極的にリヤカーを引く流れとなっている。

## 5.2 見えなくなった強固な自我

さらにもう一点、彼女の強固な意志を示す印象的な出来事があった。北原は、1951年のクリスマスの夜に、それまで残していた「蟻の街」に関する新聞や雑誌の切り抜きといった資料をすべて焼き捨てている。彼女は、松居によって自分が「蟻の街」の広告塔にされていることに嫌気がさしていた。それを松居に訴えると、自分は「蟻の街のマリア様という役に扮している女優にすぎない」ことを自覚するように抗議される。すべては「天主様が人類を導くために描かれた演劇であって、人間は、その筋書通りに演ずる俳優にすぎない」というのだ<sup>60</sup>。その話を聞き、「もう自分のことを高慢に書き散らすような蟻の会に関する記録をまとめる気持ちがなくな」り、それまで大切にとっておいた資料を残らず燃やしたのである<sup>61</sup>。

だが、そのような場面も映画からは消えている。映画内の北原は、松居から、自分は「女優にすぎない」と言われ、反論できずに落胆するにとどまる。確かに彼女の手記でも、その言葉に言い返したという記述はない。しかし、「私は自分が操り芝居の人形だったような気がして、正直をいうと最初は先

に怒り、「先生は、こわい顔をして、そのまま何処かへ姿を消してしまいました。みんなは大騒ぎをして二三時間さがし廻った挙句やっと、庭のはずれの草むらの中に、先生が黙って立っているのを発見しました」（北原、175頁）。

<sup>59</sup> 北原は次のように書いている。「正直に白状すると、第一日はバタ車どころか、リヤカーを曳く勇氣すらありませんでしたので、一握りの縄を拾っては、一々それを袖の下にかくして、私の家までかけ戻っておりました。それも、拾う前に思わず息を深くすって、前後を見廻し、誰もみていなそうな時をねらって、大急ぎで拾いあげるので」（北原、119頁）。

<sup>60</sup> 北原、182頁。

<sup>61</sup> 北原、185-186頁。

生が憎くてたまらなくなったほどでした」と書かれている<sup>62</sup>。その後、松居の言うように、「私にうぬぼれがあった」と気づいたと書くが、それをきっかけに自分が取り上げられた記事類を全部焼いてしまうというのもいささか極端な行動である。それは、自己批判の意味もあっただろうし、また松居への反発心の表れであったのかもしれない。ただ、理由がどちらであったにしろ、彼女が強い自我と熱情を持っていたことを示す言動である。しかし、映画ではそのような行動は描かれなかった。

### 5.3 「聖女」ではない生身の女性

上記の例からわかるのは、北原が「聖女」である前に、一人の一般的な若い女性であったという事実である。『蟻の街の子供たち』では、新聞や雑誌記事、舞台や映画と、掲載媒体が大きくなるなかで固定化されていった「聖女」像に反する、生身の女性としての姿が確認できる。北原には、他者に対する怒りの感情も、バタヤになりきるさいの戸惑いも、そして資料を一切焼き捨てるなどの情熱的な面もあった。そのような普通の一個人が、苦悩を重ねながら「バタヤ部落」に尽くしたからこそ、その献身はより高貴なものとなったとも言える。しかし、マスメディアに登場する度に、北原のイメージからそのような等身大の一面は除外されていった。映画の冒頭から最後まで、「聖女」のイメージで描かれたのだった。

このようなイメージの変換は、松居や五所をはじめとした作家たちが戦略的に行ったとも言えるが、ではなぜそうしなければいけなかったのか。それは、彼らを含めた発信者が男性であったゆえのジェンダーバイアスが、意識的であれ無意識的であれ働いていたのと同時に、世間がそのような像を期待していたからだとは言えないか。先述の『二十四の瞳』の女性教師のように、1950年代の社会は弱者とともに泣き、そして寄り添う女性を理想とした。そのような像の邪魔になるような側面は、自然と削がれる運命にあったのである。評論家の江藤文夫は、その点について鋭い指摘を行う。

松居桃楼氏の小説となって現われ、さらに芝居もでき、今また映画にもなるということで、話題がひろがって行くにつれて、ナマの事実の持つ感触というものも、同時に失われて行くようになった。北原さんの献身的な生活は、貧しい人々に捧げられた一つの美談ともなって、多くの人々の間にひろめられた。人々の口づてにひろがって行った事実の伝

<sup>62</sup> 北原、184頁。

播と、マス・コミのメカニズムを通し伝わって行った話題のひろがりとの間に生じたギャップ、映画『蟻の街のマリア』は、ちょうどその間に立って苦慮したような作品である。<sup>63</sup>

江藤は、個々のショットが「バタヤ部落」の実感を捉えていることや、松居役と北原の確執を取り上げたことを評価しつつも、全体として物語が北原の美談に傾いていると記した。北原個人のイメージが神格化されていくとともに、「蟻の街」関連の作品も北原個人の美談に回収されていった様子が見える。「蟻の街」の悲惨さよりも北原の美談に焦点を当てることは、彼らより裕福な層の観客が、格差社会へ加担している当事者としての罪悪感を持たないでいることを許したとは言えないだろうか。結果としてこの映画では、貧困層を生み出す社会構造そのものへの問題意識を喚起することが主目的とならなかった。

それは五所監督の狙いどおりであったとも言えるが、北原個人が抱いた、貧困層の人びとの助けになりたいという思いからはますます離れていった可能性は無視できない。また、彼女をきっかけとして「蟻の街」その他の貧困を考えてほしいと願った松居の戦略も、北原を神格化しすぎたがゆえ、一時期消費された物語としての結果しか残せなかったのではないか。

では、よりシビアに貧困層の苦難に焦点を当てていたらどうかと考えれば、それは社会の側が好んで受け入れたとも考えにくい。貧困という社会問題を広く世間に訴えるには、北原の行動のような美談をからめることが有効であり、またその当時の限界であったと言える。

あるいは、北原像がより実像に近く、負の感情も見せていたらどうだろう。または、もう少し指導者的な役割をになった描き方になっていたとしたらどうか。どちらの場合でも、「聖女」や「寄り添う女性」のイメージから離れ、観客が安心して心地よく感動できたかどうかは不明である。

江藤の言うように、北原の言動は「ナマの事実の持つ感触」を失いながら「一つの美談」として表現されていったのである。

なお、北原自身が上記に示したような負の感情を目立たせることを嫌ったという可能性もないわけではない。ただ、ここに並べたのは、北原も目にしたであろう書籍『蟻の街の子供たち』に記載されたいくつかの文章である。よって、彼女はこれらのエピソードが書籍に載ることを承諾していた。北原自身が承知していても、むしろ周囲の男性や社会が、それらのむやみな露見

<sup>63</sup> 江藤文夫「蟻の街のマリア」『映画評論』1959年新年号、映画出版社、114頁。

を避けたがったと解釈するのが自然だと考えられる。

## 6. おわりに

「蟻の街」と北原怜子に関するメディア表象を探ることで、いくつかのことが確認できた。第一に、専門雑誌から大手新聞へと読者層が広がるごとに、「蟻の街」という集団をとおして貧困問題を考えるという側面は薄れていったという事実だ。「蟻の街」は、その実像よりもイメージが重視されるようになっていった。そして、それは聖なる集団とされたり、排除すべき悪とされたりと、読者のニーズに合わせて都合良く位置づけられた一面もある。

第二に、舞台や映画という、創作物へと変換されるなかで、「蟻の街」は背景として機能するようになり、焦点は北原個人へと移っていった。映画の原作や監督、脚本家はすべて男性である。主役は女性の北原であっても、その表象のされ方は、彼ら男性によって決められた。その結果、北原は「聖女」イメージをますます強くまとうようになっていった。

男性陣の意識をとおして描かれた北原からは、彼女が本来持っていたいくつかの感情が消えていた。街で見かける女性に対する反抗心や、子どもたちへの憤りの感情、あるいはバタヤになることで世間から向けられるさげすみの眼に怯える心などである。いずれもごく普通の若い女性なら持っていて何も不思議ではない心情であるが、舞台や映画ではそれらが排除された。彼女にある負の感情や強い自我をなくすことで、「聖女」としてのイメージを確保できたからである。

ただし、そのような変容は、「蟻の街」関連の作品にかかわった男性らだけに責任があったのではなく、世間がそのような女性像を好んでいたという側面も影響したと考えられる。貧困に焦点を当てた作品を世に送り出す時、そこには北原のような「聖女」の物語が求められた。そうでなければ、世間にスラム街という現象に関心を持たずこと自体が困難であった。北原の言動は賞賛され、感動を生んだが、それは一個人の物語として回収されがちであった。また、彼女をひたすら「聖女」として印象づけた作品は、一時の流行を呼んだが、長く語り継がれる物語にはなりえなかった。貧困を鋭く描いた作品としてではなく、一人の「聖女」による感動物語としての印象が強まったからである。

このように、「蟻の街」の表象は、メディアが異なるにつれてそれぞれのイメージが作り出され、紡がれた。1950年代の日本社会がその都度いかにして貧困問題と対峙してきたかが、この一例から学べるだろう。

貧困問題に限らず、多くの社会問題がメディアで報じられ、そして作品の中で表象される。ただし、この「蟻の街」の事例のように、時にその報道や

表象では、ある一部への焦点化が際立つ。「蟻の街」現象においては、バタヤという存在をとおして、貧困問題を鋭く世に問うことが可能だったはずだが、いつしか北原個人の感動物語としての側面が強くなった。解決の難しい貧困問題を真正面から捉え考え続けるより、「聖女」の献身的な姿に一時的に涙するほうが、受け手にとっては心地よく、罪悪感を伴わなくてすむという理由もそこにはあるかもしれない。

その種の感動が強く受け手の心に残り、ひいては社会問題の実質的な改善にまでつながるようなケースもあるかもしれない。しかし、この「蟻の街」現象のように、一時期の流行として終わり、忘却される場合も少なくない。マスメディアに関わる者、そしてそれを受容する者両者が、その傾向に自覚的であることの重要性が問われるだろう。

### 参考文献

- 岩田正美 (2017) 『貧困の戦後史 貧困の「かたち」はどう変わったのか』 東京：筑摩書房
- 北原金司 (1971) 『マリア怜子を偲びて——その愛は永遠に』 東京：赤城会
- 北原怜子 (1953) 『蟻の街の子供たち』 東京：三笠書房
- 五所平之助 (1977) 『わが青春』 東京：永田書房
- 佐藤忠男編 (1977) 『お化け煙突の世界 映画監督五所平之助の人と仕事』 東京：ノーベル書房
- 鶴見俊輔 (2008) 『日本の百年〈9〉 廃墟の中から—1945～1952』 東京：筑摩書房
- 中谷いずみ (2013) 『その「民衆」とは誰なのか ジェンダー・階級・アイデンティティ』 東京：青弓社
- 野中乾・星野朗 (1973) 『バタヤ社会の研究』 東京：蒼海出版
- 藤原辰史 (2019) 『分解の哲学——腐敗と発酵をめぐる思考』 東京：青土社
- 松居桃楼 (1953) 『蟻の街の奇蹟—バタヤ部落の生活記録』 東京：国土社
- 松居桃楼 (1958) 『蟻の街のマリア』 東京：知性社
- 松居桃楼 (1963) 『アリの町のマリア北原怜子』 東京：春秋社
- 水谷憲司 (1977) 『映画監督 五所平之助』 東京：永田書房
- 本岡拓哉 (2019) 『「不法」なる空間に生きる 占拠と立ち退きをめぐる戦後都市史』 東京：大月書店

## 「バタヤ部落」とメディア表象

### ——「蟻の街」および北原怜子の事例から考える 貧困報道——

小谷七生

Kobe City University of Foreign Studies

#### ABSTRACT

本稿の目的は、1950年代、東京にあった「バタヤ部落」である「蟻の街」に注目し、そのメディア言説と表象を分析することである。廃品回収業を担うバタヤによる互助組織は珍しく、「蟻の街」は一種の社会現象となった。しかし、その報道のされ方には二面性があった。読み手の都合に合わせて、善と悪の両方のイメージを背負わされていたのである。また、映画化される際は、大学教授の令嬢でありながら「蟻の街」の救済に短い生涯を捧げた北原怜子という人物に重点が置かれ、貧困問題そのものよりも、北原という一個人の感動物語として消費される傾向が強くなった。そして北原像にはジェンダーバイアスがかかっていた。

「蟻の街」にまつわるメディア表象を分析することで、当時の社会が貧困問題に向けていたまなざしについて考えたい。

Keywords: 貧困 マスメディア ジェンダーバイアス 蟻の街 北原怜子

